

第20回東邦大学医学部佐倉病院内科学講座例会 および第4回東邦医学会佐倉内科分科会

2011年12月4日(日) 9時55分～17時50分
ウィシュトンホテル・ユーカーリ メインタワー4階 フォレスト

開会の挨拶 鈴木康夫教授 (10:00～10:10)

第I部 学内および学外研究発表(発表5分, 討議3分) 10:10～12:20

学内研究発表 10:10～11:55

Aグループ(呼吸器アレルギー疾患) 10:10～10:26 座長 南雲彩子

1. IPF増悪における酸化ストレスマーカーd-ROMsの変動

松澤康雄

Idiopathic pulmonary fibrosis (IPF)の増悪における酸化ストレスの関与を明らかにするため、IPF患者30名の増悪前後のdiacron-reactive oxygen metabolites (d-ROMs)値と病勢と比較検討した。その結果、IPF増悪時にd-ROMs値の有意な上昇を認め、IPF増悪における酸化ストレスの関与が示された。

2. 軽症喘息に対するブデゾニド/ホルモテロール配合剤の抗炎症作用についての検討

力武はぎの

軽症喘息患者を対象にブデゾニド/ホルモテロール配合剤の抗炎症効果をモンテルカストを対照として評価した結果、現在までの途中経過ではasthma control questionnaire (ACQ)の有意な改善を認めた。今後症例を蓄積し、1秒量やthe fraction of exhaled nitric oxide (FeNO)についても検討する。

Bグループ(糖尿病代謝内分泌) 10:26～10:42 座長 平野圭一

1. Sakura Study 糖尿病性腎症に対するプロブコール長期介入試験

遠藤 溪

糖尿病腎症に対するプロブコールの長期介入試験の最終報告をする。対象は糖尿病腎症162名。TC, LDL-C, HDL-Cはプロブコール投与群の方が非投与群より有意に低下した。Serum creatinine (S-Cr)は両群ともに上昇したが、投与群の方がその上昇は有意に抑えられた。透析導入は投与群で27名、非投与群で44名。生存時間分析は投与群の方が有意に延長した。このことからプロブコールが糖尿病腎症の進展を抑制する可能性が示唆された。

2. ヒアルロン酸と血管弾性の関連の検討

南雲彩子

血管平滑筋細胞におけるヒアルロン酸代謝機構を解明するため、培養血管平滑筋細胞に7-ケトコレステロールを添加し、ヒアルロン酸合成酵素のmessenger ribonucleic acid (mRNA)の発現を検討した。その結果、7-ケトコレステロールによ

りヒアルロン酸合成酵素の mRNA の発現が低下した。

C グループ (循環器) 10:58~11:14

座長 長村愛作

1. 東日本大震災における CAVI が捉えた vascular stress

清水一寛

2011年3月11日、人類観測史上4番目に大きな地震が発生した。佐倉地区は、震源から約300kmのところにあるが、ボランティアの cardio ankle vascular index (CAVI) 測定を開始したところ、震災翌日の CAVI は有意に高値であった。

2. 心不全に対する和温療法の効果

平野圭一

和温療法の健常人に対する効果とともに心不全患者での実際の効果について検討したので報告する。

D グループ (消化器) 11:14~11:30

座長 岸 雅彦

1. 免疫調節剤がインフリキシマブの体内動態に与える影響の検討

○中村健太郎, 菊池秀昌, 岩佐亮太, 古川竜一, 山田哲弘, 曾野浩治,

長村愛作, 青木 博, 吉松安嗣, 佐藤 徹, 高田伸夫, 鈴木康夫

クローン病でのインフリキシマブ (infliximab: IFX) の有効性が示されると同時に、IFX 投与継続中に有効性が消失する二次無効症例も認め、対策が課題となっている。最近 Study of Biologic and Immunomodulator Naive Patients in Crohn's Disease (SONIC study) により IFX 単独投与症例群に比べアザチオプリン (azathioprine: AZA) 併用症例群で臨床効果が有意に高いことが報告され、二次無効症例に免疫調節剤併用が有用性を発揮する可能性が推測される。したがって、AZA 併用により IFX 体内動態に変動を生じうるか否かを解析することは、二次無効症例の予防と改善策を検討するに際し重要と考えられた。

2. Improved mucosal healing during scheduled infliximab maintenance therapy in patients with Crohn's disease initiated following surgical resection of active lesions

クローン病術後、インフリキシマブ維持療法における粘膜治癒の検討

山田哲弘

当院ではクローン病難治例に対し外科切除-即 infliximab (IFX) 継続の Re-set・IFX 療法を実施している。Re-set・IFX 群 29 例と術後 IFX 群 26 例を比較したところ、Re-set・IFX 群で有意に寛解維持率が高い。これらのことから、Re-set・IFX 療法はクローン病長期寛解維持に有効と思われる。

E グループ (神経内科) 11:30~11:46

座長 遠藤 溪

1. 当院の DBS 症例の検討

館野冬樹

当院における deep brain stimulation (DBS) 施行患者の実際を報告する。2007~2011年の間に DBS を施行された 10 人を検討したところ、運動機能のみならず自律神経機能も改善する可能性が示唆された。気分障害に注意が必要である。

2. 脳血管障害と cardio ankle vascular stiffness index (CAVI)

露崎洋平

CAVI と脳血管障害の関連について、当院受診の脳血管障害患者を対象に検討したところ脳血管障害で CAVI 値が約 1.0 増加した。以上のことから、脳血管疾患において CAVI が動脈硬化の早期診断の指標となりえることが示唆された。

F グループ (総合診療部・救急部) 11:46~11:55

座長 岡田倫明

1. 救急外来における意識障害の検討

今村榛樹

2010年1月1日~12月31日の期間に意識障害で救急外来を受診した患者について検討した。症例は 202 例。疾患の内訳は薬物中毒 23 例、低血糖 18 例、ほかであった。これらに季節性、時間帯の影響もあるかどうか考察する。

学外研究発表 11:55~12:20 座長 田邊雅章

1. 重症胆石性胆嚢炎に対して continuous hemodiafiltration (CHDF) が奏功し、胆嚢摘出手術へスムーズに移行できた 1 例

小見川総合病院内科 勝俣雅夫

2. バルーン挿入目的で受診した高齢者 disseminated intravascular coagulation (DIC) の 1 例

いすみ医療センター内科 入江珠子

3. 自己免疫性膵炎の 1 例

いすみ医療センター内科 竜 美幸

学位表彰 12:20~12:30 授与 鈴木康夫

表彰

大平征宏, 山田哲弘

ランチオンセミナー 12:30~12:40

発表

大平征宏, 山田哲弘

第 II 部 後期研修医発表 12:40~13:05

座長 館野冬樹

1. 短期間で栄養状態が悪化した Chronkhite-Canada 症候群の 1 例

佐々木大樹

味覚障害と水様性下痢あり。内視鏡・小腸透視でポリポーシス認め、Chronkhite-Canada 症候群と診断。蛋白漏出性胃腸症を伴い全身状態不良。入院し中心静脈栄養・ステロイド点滴投与で加療開始し栄養状態・下痢改善。内視鏡でもポリープ減少。集学的治療により治療効果を認めた 1 例。

2. 代謝性疾患患者の生命予後と血管弾性機能 cardio ankle vascular index (CAVI)

佐藤悠太

CAVI の予後規定因子としての意義を明らかにするため、2004~2006 年に CAVI を測定した 494 例を対象に予後因子の解析を行った。その結果、予後規定因子を Cox 比例ハザードモデルで解析したところ、CAVI は独立した危険因子であった。以上より、CAVI の重要性を再認識した。

3. 糖尿病ケトアシドーシスと細菌性髄膜炎に合併し、診断に苦慮した化膿性脊椎炎の 1 例

早川 翔

糖尿病ケトアシドーシスで入院後に細菌性髄膜炎・椎体炎・硬膜外膿瘍を併発した症例を経験した。同院での類似した症例および文献的報告のあった症例を併せ、糖尿病と椎体炎・硬膜外膿瘍の関係について考察する。

第 III 部 前期 2 年目研修医発表 13:05~13:25

座長 菊池秀昌

1. MRI にて頸部筋膜炎、筋炎を確認しえた活動期潰瘍性大腸炎 (ulcerative colitis : UC) の 2 例

門屋健吾

UC では腸炎のみならず、全身に多彩な合併症 (腸管外合併症) を呈する。筋骨格筋合併症は UC の 2~3 割に発症するといわれているが、今回われわれは頸部痛を併発し、MRI にて頸部筋膜炎・筋炎を確認しえた貴重な UC の 2 症例を経験したので、その特徴および文献的考察も含めて報告する。

2. 十二指腸憩室から出血し、血管造影検査・コイル塞栓術を行った 1 例

桑原良成

症例は 80 代男性。タール便と貧血から消化管出血を疑い、gastrofiberscope (GF)・出血シンチグラフィ等を行ったものの出血点は同定できなかった。しかし吐血時に造影 computed tomography (CT) 施行し十二指腸憩室からの出血と判明した。血管造影検査・コイル塞栓術を施行し改善した症例であり報告する。

第 IV 部 前期 1 年目研修医発表 13:25~15:10

座長 清川 甫

1. 胃内内分泌細胞癌に S1 単独投与が奏効した 1 症例

北澤吉悠

46 歳男性。健診にて肝障害を指摘され精査にて胃内内分泌細胞癌、多発肝転移の診断。Transcatheter arterial chemoembolization (TACE) および化学療法にて有効 (partial response : PR) であり、1 年半の無症状期間の得られた貴重な症例を経験したので、若干の考察を交え提示する。

2. 異常腸管拡張を呈した 1 例

佐々木泉

腹痛を主訴に来院し、異常拡張した腸管の 1 例を経験したので報告する。89 歳女性。はじめは S 状結腸捻転と考えられていたが、精査をしてほかに原因があることが判明した。内視鏡検査は常に注意が必要である。

座長 岩佐亮太

3. 交通事故による前頭蓋底骨折の 14 年後に細菌性髄膜炎を繰り返した 1 例

佐々木美幸

頭部外傷後細菌性髄膜炎を反復した症例を経験した。再発防止のための考察と治療を行った。29 歳男性。過去に頭部外傷。2010 年細菌性髄膜炎にて入院加療。経過良好であったが 2011 年細菌性髄膜炎にて入院。加療後、髄液漏閉鎖術施行。髄液漏閉鎖術は前頭蓋底骨折後の髄膜炎予防に効果的である。

4. Gerstmann 症候群と考えられる 1 例

土井美佳

認知症と、Gerstmann 症候群合併例の鑑別の重要性を検討した。75 歳男性。心原性脳梗塞にて急性に極軽度右不全麻痺を生じ、失行症状、MRI 所見から Gerstmann 症候群と考えられた。「認知症」の一言で片付けないことが必要である。

座長 古川竜一

5. 遷延する発熱・リンパ節腫脹を伴った 1 例

長尾考晃

発熱・リンパ節腫脹を伴った 1 例に対して診断に苦慮したため報告する。27 歳男性。遷延する発熱で総合内科受診、リンパ節腫脹もあり精査の結果、菊池病が疑われた。早期の診断・鑑別が重要である。

6. 気管支喘息発作時の低血糖性昏睡で発症した橋本病合併 adrenocorticotrophic hormone (ACTH) 単独欠損症の1例

中山侑泉

44歳女性。呼吸苦・意識障害でER受診。気管支喘息発作時の急性副腎不全で低血糖性昏睡をきたした。最終的には橋本病合併 ACTH 単独欠損症と診断したまれな1例を報告する。

座長 露崎洋平

7. 健診異常で発見されたびまん性肺疾患の1例

布井啓雄

今回われわれは稀少なびまん性肺疾患を経験したので報告する。64歳男性。特に自覚症状なく、健診の胸部X線にてびまん性の陰影を指摘されて来院。診断や治療方針について文献的考察をまじえて報告する。

8. 心不全の既往があり、混合性換気障害に誤嚥性肺炎を合併した1例

藤田欣也

76歳男性。心不全、混合性換気障害の既往があり、誤嚥性肺炎で入院。肺炎は改善を示したが、せん妄をきたして全身状態も悪化。入院28日目に呼吸停止後に心停止となった。心疾患に併発した肺疾患およびせん妄について考察する。

座長 番典子

9. 重症肥満により QOL 低下をきたし肥満手術に至った1例

横川 桂

外科治療を行った重症肥満の1例を経験したので報告する。47歳男性。重症肥満 (BMI59.2) で QOL が低下し減量手術目的で来院。内科的に改善困難な肥満症例には積極的に外科治療も考慮すべきである。

10. 胃腺腫との鑑別が困難であった早期胃癌の1例

吉田健也

胃腺腫は上皮性良性腫瘍であり、基本は経過観察でよい場合が多いものの、なかには分化度の高い胃癌との鑑別が難しいもの、癌と共存する腺腫が含まれているものがあるとされている。今回、70歳の男性で約1年と9カ月の経過観察後に胃腺腫に対し endoscopic mucosal resection (EMR) 実施し、形態、大きさは変化していなかったものの、最終診断は腺癌であった1例を経験したので報告する。

座長 山田哲弘

11. 肥満外科治療を施行した「行動派」の女性肥満症例

山田 学

43歳女性。BMI35.9kg/m²。41歳時妊娠糖尿病を契機に2型糖尿病発症。通院治療中断したが不安感あり、肥満外科治療希望にて当院受診。2週間の内科入院後肥満外科治療 (スリーブ手術) 施行。肥満治療はチーム医療のうえに成立し、生活環境と人格の把握が治療の成否を握るものと思われた。

12. 下肢浮腫を主訴に来院した心アミロイドーシスの1例

渡辺康弘

治療抵抗性の両心不全の原因として心アミロイドーシスが推測された1例を報告する。66歳男性。両下肢浮腫と呼吸困難を主訴に来院。心不全の治療に難渋していたが、直腸粘膜からアミロイドが検出された。原因不明の心不全では、アミロイドーシスも念頭に置く必要がある。

第 V 部 2011 年度優良論文顕彰（授与：白井先生）と発表 司会：龍野一郎 15：10～15：25

Effect of exercise performed at anaerobic threshold on serum growth hormone and body fat distribution in obese patients with type 2 diabetes

Yamaguchi T, Saiki A, Endo K, Miyashita Y, Shirai K
Obes Res Clin Pract 5(1): e9-16, 2011

第 VI 部 佐倉病院の目指すところ 15：25～16：25

佐倉内科の未来

A グループ（呼吸器アレルギー疾患）

B グループ（糖尿病代謝内分泌）

C グループ（循環器）

D グループ（消化器）

E グループ（神経内科）

F グループ（総合診療部・救急部）

座長 川島辰男

座長 齋木厚人

座長 杉山祐公

座長 高田伸夫

座長 榎原隆次

座長 遠藤 溪

座長 鈴木康夫

第 VII 部 特別講演 座長：野池博文 16：25～17：15

講演：吉原克則 先生

（東邦大学医療センター大森病院・救命救急センター部長，院長補佐，医学部総合診療救急医学講座准教授）

演題：東日本大震災から学ぶ

吉原克則先生ご略歴

- 1978 年 3 月 東邦大学医学部卒業
- 5 月 第 66 回医師国家試験合格（第 241623 号）
- 6 月 東邦大学医学部附属大森病院にて研修
- 1980 年 6 月 東邦大学医学部外科学第 1 講座研究生
- 1987 年 4 月 東邦大学医学部胸部心臓血管外科学講座助手移籍
- 1992 年 3 月 博士（医学）取得
- 6 月 東邦大学医学部胸部心臓血管外科学講座講師
- 1994 年 1 月 日本胸部外科学会認定医
- 2001 年 6 月 東邦大学医学部附属大森病院救命救急センター副部長
- 2002 年 1 月 日本救急医学会認定医（第 2951 号）
- 12 月 日本外科学会専門医（第 1901147 号）
- 2003 年 1 月 日本感染症学会 ICD（第 2068 号）
- 6 月 東邦大学医学部総合診療・急病科学講座講師移籍
- 2004 年 4 月 日本心臓血管外科学会専門医（第 5101382 号）
- 9 月 日本救急医学会専門医（第 2951 号）
- 12 月 東邦大学医学部総合診療・急病科学講座助教授
- 2005 年 4 月 東邦大学医療センター大森病院・救命救急センター部長
- 7 月 東邦大学医療センター大森病院・院長補佐
- 2007 年 4 月 東邦大学医学部総合診療・急病科学講座准教授
- 2008 年 12 月 日本外科学会指導医（第 s006141 号）
- 2009 年 7 月 総合診療・救急医学講座准教授（講座名称変更）
- 2010 年 11 月 日本救急医学会指導医（第 2951 号）
- 現在に至る

専攻分野

救急医学, 心臓血管外科, 災害医療

学会の役職 (公的委員会活動などを含む)

日本小児循環器学会評議員, 日本救急医学会関東甲信越地方会評議員, 東京都消防庁事後検証医, 東京都メディカルコントロール協議会・指示指導委員会委員, 横浜市救急医療検討会委員

第 VIII 部 研修医発表表彰式 (授与: 川島辰男) 17:20~17:35

閉会の挨拶 鈴木康夫教授

(17:35~17:45)